

Time doesn't
matter in love.
A dramatic love story of
the highest
calming kind.

Hina
&
Ichiya

完全版

リップ
スティック

The complete

Miju Inoue
井上美珠



エタニティ文庫

Lipstick

The complete

〔目次〕

リップスティック1	317
リップスティック2	595
〔番外編〕 幸せのその先に	



007

Lipstick

The complete

リップステイック
1

夏休みをもらって故郷に帰ってきた。

塾の講師をしている比奈には、あまり休みがなく、一年に一回か二回の帰郷がやっとのこと。二十五歳、上京し、自立して働いている同世代の仲間うちの中では、帰っている方だと思ふ。それでも、父や母は一人娘があまり帰ってこないと、不満を覚えているようだった。だから仕方なく、今回の帰省を決めた。久しぶりに飼ひ猫のユキにも会いたい。しかし帰ったからといって、何かすることがあるわけではない。

今日だって、暇そうだという理由で、母にお使いを言いつかつた。お使いをするのなんて、五年ぶりくらいだ。

頼まれたのは、和菓子。今日は母の友人が遠方からいらつしやるのだそうだ。遠いところから帰ってきた娘には何も出してくれず、お使いにまで行かせるなんて、母は人使いが荒い。たまの帰省なのだから、自分にも美味しいものを作ってくれてもいいのに。

和菓子を買いに行く先は、歩いて二、三分ほどの場所にある、秋月堂という老舗の和菓

子屋。はつきり言つて、行きたくない場所。そこには、反りの合わない人がいる。相手はどう思っているかわからないが、少なくともこちらはそう思っている。

秋月堂には年の近い三兄弟と、少し年の離れた妹が一人いる。三男の篠原健三は同い年で、すごく仲がよく、幼馴染という間柄。小学校から高校まで一緒に、大学だけ離れた。その後、同じ東京方面に就職を果たしたのだった。

健三は就職後に結婚した。とても可愛い彼女がいたのは知っている。だから納得しながらも、どこか残念な気持ちでいっぱいだった。そこで初めて自分の本当の感情に気付いたのだが、時すでに遅し。

去年の夏、健三の結婚式のことだった。

挙式と、それに続く披露宴の後、しばらく杳然としていた。今更告白はしないが、自分の思いを何らかの形で残したいと思つた。そして、思い立ってあることをしていたところを、健三の兄、忝哉に見られてしまったのだ。

忝哉とは昔から、何となく反りが合わなかつた。忝哉は高学歴、高収入、背も結構高い。一流の外資系商社勤めという華々しい経歴を捨て、今は実家の和菓子屋の運営をしている。

長男の忝哉が社長のような位置にあり、次男の浩二が職人として店を切り盛りしている。秋月堂は現在、この二人によって支えられている。

秋月堂の一家のことは、健三からよく聞いていた。

壹哉が会社を辞めて家業を継いだという話を聞いたのは、確か一年前のこと。ちょうど、健三が結婚するという時だったと思う。

いろいろと考えながら秋月堂に行きつくと、自然とため息が出た。これから会う人のことを考えると気が重い。

季節は七月の半ば。暑い道のゴールである和菓子屋の引き戸を開けると、クーラーの涼しい風に包まれた。古びているけれど趣のある店の中から、涼風に乗って甘い匂いが漂ってくる。その後すぐに壹哉が顔を出す。両親から店の顔になれと言われて、カウンターに立っていることが多いのだそう。

「こんにちは」

挨拶をしないわけにはいかないから、声をかけると、壹哉も柔らかい笑顔で返してきた。「いらつしゃい。久しぶり、比奈さん」

壹哉は六歳年上だ。健三には呼び捨てにされているのに、年上の壹哉に、さん付けで呼ばれるのはどこかむずがゆい。

「はあ、久しぶりですね」

普通の女の子だったら、壹哉のこの笑顔に惱殺されるのかもしれない。顔もいいし、清潔感溢れる着物は、それだけで絵になる。きっと、女性に不自由したことなどないだろう。しかし、壹哉をよく知っている比奈には効かない。

「お菓子、買いにきました」

「それ以外の用事である？」

壹哉は優しい顔で、さりげなく嫌味を言った。健三はいつも、壹兄は嘘をつかない正直な人だと褒める。比奈も確かにそう思うけれど、時々壹哉の言い方が気に入らない。

「そうですね」

笑顔が凍りつきそうだったが、なんとか持ちこたえた。壹哉に会うのは、健三の結婚式以来だ。

「適当に見繕ってください？ 二千円くらいで」

「お客さんにお出しするもの？」

無言で頷くと、壹哉は奥に入ってしまった。表のガラスケースの中に入っている商品を出してくれるのだと思っていたが、奥にある菓子を詰めてくれるようだった。

その中身を見せてもらおうと、色とりどりの菓子はどれも美味しそうなものだった。

「じゃあ、ちょうど二千円で」

比奈はお金を出し、陶皿の上に置いた。壹哉はそれを受け取り、菓子箱を紙袋に入れると、表に出て手渡してくれた。こういう丁寧な対応をする店が繁盛しないわけではない。感心しながら袋を受け取った時、壹哉の笑顔とぶつかった。

「ありがとうございます」

比奈が礼を言うと、沓哉は可笑しそうに笑った。「それはこっちの台詞せりふ。お買い上げ、ありがとうございます。今度、お茶しにおいで」

「え、ええ、そうですわ」
比奈は力なく答えた。秋月堂には、お茶を飲むスペースもある。和菓子を楽しむのにぴったりのいい雰囲気だと、地元の人気を集めている。でも比奈は日本茶よりもジュースの方が好きで、和菓子もあまり好きではない。

「私、熱いお茶は苦手です」

「冷たいお茶も置いてるよ。夏だから」

沓哉の視線は店の外へ向けられた。暖簾れんの隙間から見える風景を、強い日射しが鮮やかに映し出す。

「だけど和菓子も苦手なんです、なんか甘すぎるし」

和菓子屋の店主に対して言う言葉じゃなかった。そう思って比奈が視線を上げると、意外にも沓哉は笑っていた。

「奇遇だね、僕も甘すぎるのは苦手だ」

他に客がいなかったからいいが、こんなこと、和菓子屋の店主は普通言わないだろう。けれど、沓哉らしい素直な言葉だった。沓哉は比奈を見て、にこりと笑う。

「ありがとうございます。またお越しください」

一礼する沓哉の仕草は洗練されていた。和服を着ているため、それが余計に映える。またお越しください、と言われたが、また会うことはないだろうと、比奈は心の中で思う。

比奈は振り返らず、強い日射しの中に足を踏み出した。そして暑い道を歩きながら、昔のことを思い出す。

比奈が初めて沓哉と会ったのは、比奈が十四歳、中学二年生の頃だった。六歳年上の沓哉は二十歳で、大学生だった。初めて会った時は、どことなく冷たい印象を受けた覚えがある。健三と似ているけれど、健三よりも育ちがよさそうで、上品で、大人びた雰囲気を持っていた。そういう雰囲気の人が、にこりともせず、こちらをじっと見つめる黒い目が好きになれなかった。

比奈と出会う数年前から、沓哉は身体が弱かったのだ。栃木の祖母のところで静養していたそうだ。それに、沓哉は加減がよくなっても、家には戻ってこなかった。全寮制の中高一貫校に進学したのだ。実家に帰らない代わりに、栃木の祖母のところへはよく帰っていたという。だから家が近所だというのに、あまり会うことがなかった。

一年前のあの日、あの時、沓哉から真っ直ぐに言われた言葉がいつまでも嫌な思い出として残っている。

その出来事が悔やまれる。あのことさえなければ、比奈は沓哉とこれほど話しにくくはならなかっただろう。もう少しスムーズに、構えることなく気軽に話ができただけだ。

☆☆☆

去年の夏、健三の結婚式当日は快晴で、ものすごく暑い日だった。花嫁は、もともと可愛らしい子だったが、その強烈な日射しの下でもすごく綺麗だった。比奈も会ったことがあり、彼女とは意気投合して仲がよかった。一緒に買い物や遊びに行ったことだって何度もある。

なのに、健三と彼女の結婚式で感じたのは、心のざわつき。健三が彼女と二人でいるのを見るだけで、心が落ち着かなかった。それは以前にも感じたことのある感情、心。健三に最初の彼女ができた時もそうだった。けれど、こんなにも激しく心が騒いだことがあっただろうか。

ライスシャワーを浴び、幸せそうな二人。

それを見て、激しく動揺してしまった。と同時に、気付いたことがある。

健三は幼馴染だった。だから恋愛はあり得ないと、自分で心にブレーキをかけていたのだ。

比奈は昔から健三が好きだった。そう認めてしまえば、全てにおいて納得がいく。好きだからこんなにも胸が苦しくなるのだ。

披露宴の後の二次会は健三の実家の和菓子屋で行われた。出張のバーテンダーを呼んで、酒も入ってかなり盛り上がった。しかし、自分の本当の感情に気付いた比奈は、なんだか盛り上がる気分になれなかった。

比奈と健三は子供の頃からずっと身近にいたのに、いい雰囲気になったことが一度もない。そもそも、恋愛に対して自分から積極的に動いたことがあっただろうか。自分の心に問いかけてみると、否定の言葉しか見つからない。

開き直るしかないと思うと、なんだか妙にスッキリした気分もある。幸せそうな二人を見ると、まだ心がざわつくけれど、この感情はどこかにやるしかないのだ。健三とはいつまでもいい友達でいたい、幼馴染の関係を崩したくない、と思うから。

まだ二次会の途中だったけれど、比奈は一足先に帰ろうと外に出た。駐車場には、健三の車が停まっていた。その助手席に初めて乗せてもらったのは自分だ。それからというもの、何度も何度も助手席に乗せてもらった。比奈は健三の車の方へ歩く。ドアミラーに顔を映してみると、口紅がはげていた。唇を指でなぞる。口紅がないとメイクが変。

比奈は、今日の服に合わせた綺麗な桜色のリップスティックをバッグから取り出し、ドアミラーを見ながら口紅を塗り直す。そして、目をつむってミラーに唇を寄せた。

桜色のキスマークが鮮やかに残る。それは比奈にとっては記念すべき初めてのキスマー

クだった。けれど、誰かに見られたら大変、消さなければ、と思い、手を伸ばしかける。でも消してしまえば、キスマークと一緒に健三への思いまで消えてしまいそうで、手が躊躇する。このまま、桜色のキスマークを健三の車に残しておきたかった。

思わず涙が出そうになる。比奈の健三への思いはここで止まったのだ。もうこれ以上は進むことが許されない。

「好きだった？ 健三のこと」

不意にかけられた声に振り向くと、そこに壹哉がいた。比奈は慌てて涙を拭う。壹哉は高そうなスーツに身を包み、「好きだったんだろ、やつぱりな」と言いたげな表情をしていた。

「好きだったら、いけませんか？」

比奈がそう言うと、壹哉は首を振った。

「別に、ただ……」

壹哉は車に近づき、ドアミラーのキスマークを見た。比奈の唇の跡、思いの跡。

「健三は、比奈さんの気持ち、知らないでしょ？ もし知ったとしても、今更だよなあ。結婚してしまった男を思い続けるのは不毛だよ」

その言い方にカチンとくる。

「そんなこと、わかってます。それに、健三は知らなくてもいいことだし」

見つめ合い、沈黙の時間がしばし流れる。

「健三も馬鹿だな。こんなに可愛い子がすぐ傍にいたことに気付かないなんてね」

その言葉に余計腹が立った。可愛くても、近くにいっても、どうにもならなかったことだ。健三にとって、比奈は幼馴染以上の存在じゃない。

「余計なお世話です！」

カッとなった比奈はその場を走り去った。

大好きだった健三の車、そのドアミラーに口紅でキスマークをつけているところを、よりによって、健三の兄に見られてしまった。恥ずかしくしてしまうのがなかった。

☆ ☆ ☆

比奈は三日ほど実家で過ごし、帰り支度をしていた。

「比奈、もう行っちゃうの」

母が少し寂しげな表情で声をかけてきた。

「うん、三時の新幹線があるから、それに乗ってく」

「寂しくなるわね。ねえユキ」

そう言いながら母は猫を抱き上げ、「次はいつ帰ってくるんでしょうね」と猫の喉を撫

でていた。

去年は健三の結婚式に合わせて帰ってきたきり、今年もこの夏が初の帰省だった。飼猫のユキもだいぶん年をとってきたことだし、これからは少なくとも年に三回は帰ってこようかと思った。母の「寂しい」という言葉を聞けばなおさらだ。

実家に戻って親孝行したいな、とも一瞬考えた。地元にも、比奈が講師をしている塾の系列校がある。上手くすれば、転勤扱いにしてもらえるかもしれない。

「比奈、よかつたらこのアンケート葉書を秋月堂さんに届けてくれない？ このまえ比奈が買ってきてくれた和菓子の中に、新作が入っていたんだって。その感想を送ってくださって書いてあったから」

比奈は思わず眉間に皺おぼを寄せる。母は本当に人使いが荒い。せっかく母の心を汲くもうと思っていたところなのに。

「そんなの郵送すればいいじゃない、それが自分で届けてよ。お母さん、壺哉さんのファンなんでしょ」

「やーよ。お母さんは掃除に洗濯にと忙しいの。そりゃ確かに壺哉君のファンには違いないけど、家のことをしなきゃならない時は、そっちが優先。あんた、新幹線の時間まで暇でしょう？ 行ってきてよ」

時計を見ると、午後一時。帰り支度はもうできているし、秋月堂まで行くくらい、ど

うってことはない。

「行ったついでに、あんたも新作の和菓子を食べてきたら？ この秋の新発売なんだって。栗がのついでに美味しかったよ」

「なんか面倒」

比奈はほやくが、「いいじゃない、時間あるんだし」と母は引き下がってくれない。

「みゃあ」

すり寄ってくる猫のユキを撫なでて抱き上げた。

「行きたくないな。ユキの手を借りた」

ユキはまた、みゃあ、と鳴いた。

時間はまだ充分にあるし、秋月堂までは歩いて三分しかかからない。壺哉にさえ会わなければ、届けに行ってもいい。

でも、ちょっと待って。今日は木曜だから、たしか秋月堂はお休みのはず。ならば壺哉には会わず、帰ってこれるかもしれない。

「仕方ないから秋月堂に行ってくる」

「あら、じゃあ壺哉君によるしくね。あと浩二君にも」

「どうして、よろしくしなきゃなんないの？」

比奈が言うと、母は「だって」と話を続けた。

「二人のファンなんだもの。健三君もいい男だけど、結婚しちゃったでしょ。壺哉君と浩二君は独身だからオッケー、目の保養になるわ」

「はいはい、じゃあ行つてきますからね」

玄関を開けると日射しがまぶしい。今日も暑そうだ。日傘を開き、手の中のアンケート葉書を見つめる。そうして一つため息。苦手な壺哉とは、できれば会いたくない。

☆☆☆

秋月堂の引き戸は開いていたが、中は暗かった。いったん戸を閉めて外へ出て確かめてみると、本日休業の札がさがっていた。休みなのに鍵がかかかっていないなんて物騒だ。比奈は店の郵便受けにアンケート葉書を投函し、家に帰ろうと方向転換した。すると、誰かが内側から引き戸を開く音がする。

「比奈さん？」

振り向くと、着物姿の壺哉がいた。比奈の希望に反し、またしても壺哉と会ってしまった。

「今日はお休みじゃないんですか」

ちよつと尖った声で言うと、壺哉は相変わらず丁寧な口調で返してくる。

「今日は柵卸しでね。外で物音がしたようだったから、出てきたんだよ」

比奈は無言で郵便受けを指さした。壺哉は中身を確認しに行く。

「ああ、これ。わざわざ持ってきてくれたんだね。ありがとう」

「母が持って行けて、うるさいから」

「じゃあ、と比奈は帰ろうとした。

「比奈さん、せっかくだから、お茶でも飲んでいったら」

壺哉が比奈を引き止める。

「でも私、三時の新幹線で帰るので」

「まだ時間あるけど」

腕時計を見ると、確かにまだ余裕がある。しかも、家はすぐそこ。断る理由はない。

「……少しだけなら」

「どうぞ」

店の中はひんやりしていた。強烈な日射しの中から薄暗い室内に移って目が少しくらんだが、すぐに慣れた。客席に案内され、しばらく待つ。ここでお茶を飲むのは初めてだった。

「お待ちせ。どうぞ」

冷たい緑茶と栗の和菓子。壺哉は比奈の前に座った。彼の茶碗からは白い湯気が上がっ

ている。

「この暑いのに、熱いお茶ですか」

一口飲んだところで比奈が言う。

「暑い時に熱いお茶を飲むと、かえって涼しく感じるものだよ」

着物の姿の壺哉がお茶を口に運ぶ仕草は堂に入っていた。着物のせいだけではなく、内面から滲み出る品のよさと教養の高さを感じさせる。

比奈は菓子も口に運んだ。栗の味がするそれは、あまり甘くなかった。冷たいお茶とよく合って、珍しく和菓子を美味しいと感じた。

「美味しい」

「それはよかった」

壺哉も菓子も口に運ぶ。やはり綺麗な食べ方だった。その姿に、比奈は思わず見入ってしまった。そんな自分にはっと気付き、内心、激しく首を振りたくないと思った。

こうやって二人きりで壺哉というのは、初めてのことだ。比奈はなんだか落ち着かない気分になる。

菓子もお茶もいただき終わると、壺哉が小さな箱を比奈に差し出した。

「なんですか、これ」

「見ればわかるよ」

包みを開けると、中には口紅が入っていた。金色のケースに一粒だけラインストーンがついたデザイン。どこのブランドのものかはわからないが、シンプルでおしゃれだった。しかも、ちょっと高そう。

「比奈さんが今日帰るとおばさんが言っていたから、おうちの方へ届けようかと思っていました」

リップスティックの色は、綺麗な桜色だった。あの日、健三の車につけた桜色よりもやや濃い色合い。

「今度は車にじゃなくて、きちんと人につけてあげて。健三のことはもう吹っ切れているだろうし、ね。余計なお世話だとは思いますが」

「ほんと、余計なお世話です」

壺哉は苦笑いをして、そうだね、といつもと変わらぬ調子で言った。比奈がちょっと苦手に感じてしまう声と口調、そして表情。でも今日はなぜか、その笑顔に優しさを感じる。

「……ありがとう。綺麗な桜色ですね、嬉しい。つけてみてもいいですか？」

「もちろん」

バッグの中を探って小さな鏡を見つけた。唇が鮮やかに彩られる。比奈は顔を上げて、壺哉を見た。

「よく似合ってる」

「ありがとうございます」

比奈は壹哉に笑顔を向けた。壹哉も比奈に微笑み返す。

ずっと、冷たい人だと思っていた。けれど、それは壹哉が持つ独特の雰囲気のせいなのかもしれない。そう、この人は基本的に優しい人なのだろう。

あの日、あの時、壹哉が比奈に声をかけたのも、その優しさからだだったのかも。比奈は健三に対する思いを完全に断ち切れずにいたし、車にキスマークなんて、不毛な行為をしていたから。

「そろそろ、帰ります。お茶、ありがとうございます。おいくらですか」

「こっちが誘ったんだから、お代はいらないよ。またおいで、比奈さん」

「そうですね……また来ます」

比奈はもう一度、ありがとうございます、と言った。壹哉は、いつもの悩殺スマイルで比奈を見送った。

今日ばかりは自分も悩殺されそう。心なしか、顔が熱い。

☆ ☆ ☆

「ただいま」

「おかえり、遅かったじゃない」

「うん、お茶をご馳走になったから」

いいわねー、と言いながら母は比奈の横を通り過ぎようとして、桜色の唇に気付いて足をとめた。

「あら綺麗ね、その色」

「そう?」

「似合ってるよ」

比奈は口紅を確かめたくて、洗面所へ向かった。本当に綺麗で鮮やかな桜色だった。嬉しくて、思わず口角が上がってしまう。

そうこうするうち、新幹線の時間が近づいてきた。母は猫を抱き、玄関まで見送りに出てくれた。

「じゃあ、お母さん、また帰ってくるから。ユキも、またね」

「気を付けてね」

母に頷き、ユキを撫でると、にゃあ、と鳴いた。玄関を出れば、熱い日射し。比奈は重い荷物を片手に、日傘を開いた。肩から掛けている小さなバッグには、あの鮮やかな桜色のリップスティックが入っている。壹哉が言ったように、今度は好きな人にこの桜色を移せたらどんなにいいか。

それがいつになるのかわからないけれど、近くそういう人が現れそうな気がする。リップスティックの魔法のせい？

2

篠原壹哉にとって、女性との別れは、いつも似たようなパターンだった。

『私、壹哉が好きだけど、壹哉よりも好きな人ができたの。私のことを、とつても大事にしてくれそうな人』

それじゃまるで、壹哉が大事にしてこなかったように聞こえる。

『壹哉のこと、わからなくなってきた。私みたいな女、きつと本当は好きじゃないのよね？』

と言われることもよくあった。自分にも言い分はあるが、わざわざ反論はしない。こういう場合、悪いのは男の方だと、女性は思っているに違いないから。

付き合っている女性と別れるきっかけは、この二通りのパターンのどちらか。何度も同じ失敗を繰り返してきた。一番長く続いた人でも二年。後は、一年とか一年半とか、最短期間で三ヶ月。

けれど、それは仕方ないことだとも言えた。壹哉自身、本当に好きかどうかもわからないまま、なあなあで女性と付き合っていたのだから、心がこもらなければ自然と不誠実になる。

そもそも、壹哉はちよつと奥手だったのだ。高校まで全寮制の男子校だったため、本格的に彼女ができたのは、十九歳になってからだだった。

もちろん、それまでにも好きな人はいた。デートしてみた人もいる。だが、誰と付き合っても、どうせ一緒じゃないかと感じていた。行きつく先はみんな同じ。ちよつとは長続きするかしないかの違いがあるだけ。

そろそろ終わりにした方がいいのかなと感じると、壹哉は自分にこう問いかけてみる。「別れるしかない、と思わないか」と。

心が離れた相手と付き合い続けられれば、お互いに苦痛を強いることになる。女性はそういう気配を敏感に察知し、自分から別れを切り出したのかもしれない。

そんな彼女たちの顔は辛そうで、寂しげだった。涙を流す女性もいた。

最後に恋人と別れたのは、壹哉が家業を手伝うことを決めた時だった。

長年勤めてくれていた人が辞め、困り果てた母を見かねて、浩二が壹哉に声をかけてきたのがきっかけだった。

その頃の壹哉は、外資系の商社に勤務していた。年中猛烈に忙しい会社で、大勢の部下に指示する立場に回っても、みずか自らこなさなければならぬ仕事量は増えるばかり。帰りはいつも午前零時を過ぎてから。そして翌日はまた早朝に出社する。そんな多忙な日々が嫌だというわけではなかったが、そろそろ終止符を打つのもいいかと思ひ、体調不良を理由に会社を辞め、実家である秋月堂の経営に回ったのだ。

弟の浩二は、「来てくれてよかった」と喜んでくれたので、思い切って会社を辞めた甲斐があつたというものだ。

壹哉はその際に、付き合っていた彼女とも別れた。実家に帰る、と壹哉が告げると、彼女の方から「別れてほしい」と言ってきた。

いいよ、とあっさり応じたのがいけなかつたらしく、彼女はくやし涙を流しながら、リップスティックを投げつけてきた。そんなことは決してしない女性だっただけに驚いたが、こんな別れもありか、と納得した。思えばあの時から口紅に縁がある。

☆☆☆

壹哉の心が比奈の方へ強引に引つ張られるように動いたのは、健三の結婚式の後の出来事からだった。比奈が、健三の車のドアミラーにキスをしていたところを、偶然、目撃し

たのだ。

その時少しだけ涙ぐんでいた比奈を見て、彼女は健三のことが好きだったのだと壹哉は確信した。

比奈と健三は、それまでの二十四年の人生の中で一番長く一緒にいた幼馴染。おとなじみ血の繋がりのない異性同士だから、互いに好きになる可能性は充分あつたし、どちらか一方が片思いをする可能性だつて十二分にあつた。

声をかければ、比奈はおそらく怒るだろうとわかつていたし、自分は比奈に嫌われていくということも知っていたが、声をかけずにいられなかつた。

「好きだった？ 健三のこと」

「好きだったら、いけませんか？」

即答する比奈に対し、壹哉は首を横に振った。いけないことはない。ただ、心の繋がらない相手にそういうことをするのは、無駄だと思つた。健三はきつと比奈を女性として好きになつたりしない。なぜなら、健三は比奈のことを異性として意識していないから。

「健三は、比奈さんの気持ち、知らないでしょ？ もし知つたとしても、今更だよなあ。結婚してしまつた男を思い続けるのは不毛だよ」

言つてしまつてから、そこまで言うことはないだろう、と心の中で自分に突つ込みを入れた。案の定、比奈は怒りの表情で壹哉を睨んだ。けれど、その怒りもすぐに消え、比奈

は顔を伏せた。

「そんなこと、わかっています。それに、健三は知らなくてもいいことだし」

恋をする女の表情だった。弟の幼馴染おともなひとしてではなく、一人の男の視線で見れば、比奈はかなり魅力的な可愛い女性だと思う。

実際、健三からいつも聞かされていたのは、「比奈は意外とモテるんだ。笑顔が可愛いんだよね」ということ。その笑顔を向けられたことのない壺哉は、そうか、とだけ答えていた。壺哉にはいつも怒ったような表情を向けるだけだったから。

「健三も馬鹿だな。こんなに可愛い子がすぐ傍にいたことに気付かないなんてね」

「余計なお世話です！」

比奈は怒りも露わに走り去った。

もともと比奈にはよく思われていなかったが、さらに悪印象を与えたことだろう。けれど、どうしても言わずにいられないような、そんな感情が湧き起こってしまったのだ。

ドアミラーについた唇の跡。壺哉が左手の親指で拭くと、その桜色が指に移った。

その日から、比奈のことが気になりだした。

比奈の近況は健三からよく聞いていた。というか、いつも健三が勝手に喋る。比奈は塾で英語の講師をしていて、最近外国人の講師に口説かれたとか、酒豪だとか、あいつに男はいないとか。聞いているうちに、比奈の人格とか仕事に対する姿勢とか、プライベートト

などに詳しくなっていた。そして、健三のその口調から、こいつ比奈のことを本当に好きなんだな、ただし恋愛感情は抜きで、と確信した。

甘え上手な健三は、結婚後もしばしば実家に帰ってきては食事をしていく。東京から約一時間しか離れていないこの土地は、帰ってきやすいのだ。

ある時、健三はこう聞いてきた。

「壺兄は相手いねえの？」

「相手って？」

わざとはぐらかすと、健三は負けずに突っ込んできた。

「好きな人とか、付き合ってる人とか」

「なんでそういうこと聞くんだ」

「気になるじゃん。壺兄がモテるのは知ってたんだよ。選り好みしてんの？ 弟の俺の方が先に結婚したし、浩兄こうけいもそろそろだよ。いいのかなあ」

へへ、と笑いながら、健三は壺哉の答えを待った。でも壺哉は答えなかった。

まさか弟から、結婚という現実を突きつけられるとは思わなかった。別に選り好みなどしていない。

ただ今はそういう気にならないだけ。

「俺が誰か紹介しようか？ あー、でも壺兄の雰囲気合う奴はいないなあ……。まだ遊

びたい盛りの奴が多いっていうか。女も二十五歳くらいじゃ、まず落ち着いてないし」

「ダメだろ。壱兄が落ち着いてるんだからさ」

「そうか？」

と言うと、健三は壱哉を上から下まで眺め、「落ち着いてるじゃん」ともう一度言った。確かに、和菓子屋の店主になってからは、母の勧めもあり、店のイメージに合わせて和服を着るようになった。けれど普段はシャツにジーンズが多い。夏にはサンダルだつて履く。

「だったらさ、比奈はどう？ あいつ、結構落ち着いた奴だし、可愛いし、何より男いなしな。紹介するよ」

そう言われて心が揺れた。けれど、それを表に出さない術すべなら知っている。動揺しずを鎮めるために、そつとため息をついて答える。

「健三、比奈さんとはもう知り合いなんだから、紹介されるも何もないだろう」

「そうだけどさ、付き合うこと前提で紹介するっていうのはどうかな？」

比奈は壱哉を嫌っているのだから、改めて紹介するなんて言われたら断るに決まっている。それはわかっているのだが、もしもそういう設定で比奈に会えたら、と期待してしまふところが、壱哉は自分でも馬鹿だなと思う。

比奈はあの口紅を使ってくれているだろうか。恋愛に対する期待と不安は、かつて持ったこともない情動だった。

壱哉は、思い切って言ってみた。

「じゃあ、きちんと紹介してもらおうか、健三」

☆ ☆ ☆

「三人兄弟のうち、独身は壱哉さんだけになっちゃいますね」

一人だけいるアルバイトの高岡真由たかねまゆみが、そう言いながら伝票の処理をしていく。彼女は次男の浩二と結婚話の持ち上がっている恋人。小柄で優しい顔をした女性だ。

「そうだね、このまま誰も現れなければ、独身は僕だけだ」

いつまでも独身でいるのには、それだけの理由があった。恋愛で煮立ったことが一度もない。沸点に至らぬ恋愛しか知らないのだ。

そんな壱哉がただ一度だけ強く心を動かされ、沸点らしきものを感じたのは、比奈がドアミラーにつけた桜色のキスマークを見た時だけだった。

処理の済んだ伝票を棚にしまっている時だった。

比奈がためらいがちに店に入ってくる。およそ一ヶ月ぶりの再会。健三の結婚式の後は一年も顔を見せなかったのに、今回はやけに早い再訪だ。どういう風の吹き回しだろう。「……いらっしやいませ」

忝哉が驚いて言うと、比奈は軽く頭を下げ、遠慮がちに口を開いた。

「こんにちは、忝哉さん。あのう、健三いますか」

「健三は帰ってきてないよ。帰ってくる時は必ず家に電話があるけど、今日はまだかかってきていない」

「え？ あ、そうですか……健三からここに来てほしい、行けばわかるって言われて……。いったいどういうことなんだろう」

比奈は首をひねって考え込んでいた。その仕草を見て、忝哉は健三との会話を思い出す。

『比奈はどう？ 紹介するよ』

『じゃあ、きちんと紹介してもらおうか、健三』

真実味のない、他愛のない約束のつもりだった。健三がまさか本当に紹介する気だったとは。

「健三に電話して確かめてみます」

比奈がそう言って店を出て行こうとした。

「僕が電話するから、ちょっと待っていて」

忝哉がそう引き止めると、比奈は振り返って、はい、と素直に従った。店の椅子に座ってもらい、忝哉はスマートフォンを取り出す。

数回のコールでつながり、健三の明るい声が聞こえてきた。

『もしもし』

「健三、比奈さんがうちに来てるけど、どういうことだ？」

思わず低い声になっていた。それを聞いて健三はまず、「忝兄、怖いよ」と言って、こう続けた。

『いや、悪いと思うけどさ、比奈に忝兄を紹介するってそのまま言っても、たぶん来ないだろ？ だから多少強引だけど、とにかく店に来て言っただ。ま、いいかなって思っただ』

と明るく笑う健三だが、それに対して忝哉のテンションは低かった。それに気付いた健三も声のトーンを下げる。

『ごめん。でもあの、上手くやって！』

そこでブツリと電話を切られた。普段は減多に怒らない忝哉だが、さすがに舌打ちして終話ボタンを押した。その様子を見ていた比奈が意外そうな顔をしている。

「健三は今日は来られないらしい。比奈さんに謝っておいて、だっ」

「え？ 来ないんですか」

「そう、仕事で来られないらしいよ」
 「三連休取ったのに。健三、すっぽかすなんて」
 「三連休？」

きつと比奈は、健三とゆっくり過ぎせることを期待して休みを取ったのだ。それなのに、すっぽかしは結構きつい。なにしろ、比奈は健三が好きだったのだから。

「このために帰ってきたんだけど」

比奈はため息をついた。そして、帰ります、と立ち上がる。それを見て、やはり声をかけずにはいられない。比奈のことは一年前から気になっていたし、何より比奈と少しは仲良くしたい気持ちがある。嫌われている事実は今のところ消せないのだが。

「もう少ししたら、店閉めるけど……食事にも行かないか」

比奈の答えを待つ時間は長く感じられた。

「食事？ 私と？」

「そう。無理だったら、別にいいけど」

壱哉が言うと、比奈は少し考ええる仕草をして、壱哉を見た。

「えっと、じゃあ……一度家に戻ります。何時くらいになります？」

「六時くらいに。比奈さんの家に迎えに行ってもいい？」

「ええ、はい。じゃあ、待ってます」

一度だけにこりと笑って、比奈は帰っていった。それを見送って、壱哉は重い息を吐く。我知らず緊張していたようで、手に汗をかいていた。さっそく、店仕舞いを始める。

約束の午後六時に間に合うように。

☆ ☆ ☆

比奈を迎えに行く約束の時刻、六時ちょうどに店を出る。少し遠出をするつもりで、車を使った。比奈の家まで、車だと一分もかからない。

車を降り、玄関のベルを鳴らすと、足音が聞こえてドアが開く。比奈は急いで出てきた様子で、靴のストラップもしていない。

「ひなあ、何時に帰ってくるの」

遠くから彼女の母、知恵ちえの声が聞こえた。比奈はきちんと履いていない靴を引きずりながら、また玄関に戻り、わからない、と大声で言って玄関のドアを閉めた。そして、何かを思い出したようにまたドアを開ける。

「遅くなりそうだったら電話入れるから」

比奈は小走りにやってくる、助手席に乗り込んだ。

「壱哉さん、早く出してください」
「どうして」

「……メイクが違うって、母がうるさくて。追っかけて見にくるかも。早く出してください」

車のエンジンをかけ、発進した。

壱哉に会うためにわざわざメイクを直したのだろうか。自分のために化粧直しをしてくれた？ これは大きな進歩だ。

比奈の唇に目をやると、桜色の口紅が塗られている。あの時プレゼントした口紅だろうか、と想像しながらハンドルを操作する。

「私、壱哉さんに聞きたいことがあったんですよ」

「何？」

「この口紅、壱哉さんが買ったんですか」

「そうだけど」

「男の人が口紅を買うなんて、抵抗ありませんでした？」

比奈は壱哉の方を見ようともせず、前方を向いたまま話す。比奈の目は、猫の目のように大きい。それも相まって、比奈という女性は、なかなか人になつかない猫のようだと壱哉は思う。

しかし、こうして誘いに応じてくれたということは、どうやら、それほど嫌われてはいないということらしい。それでもまだ信頼は勝ち取れていないだろうが。

壱哉は比奈を見ながら、こう説明した。

口紅を買ったのは、ちょっととした偶然。だから抵抗感なんかちっともなかった、と。けれど、口紅を買うことは運命だったのかもしれない。壱哉は心の中でそう呟いた。

3

『比奈、あんた最近よく帰ってくるのね。こっちで好きな人でもできた？』

母はさすがに女だからか、勘が鋭い。比奈は、そんな人いないよ、と言った。でもそれは嘘のような本当のような。健三に約束をすっぱかされ、壱哉と二人で食事に行った日以来、度々帰省しては壱哉と会っている。

壱哉と初めて二人きりで食事した時に、連絡先を聞かれた。それ以来、壱哉から誘われては、比奈は断る理由が特にないので、それに応じている。

食事に行ったり、電話をしたりと、恋人同士のような関係。けれど、付き合っているのか、という点、はつきりしない。付き合おう、とは言われていない。

「壱哉さん、送ってくれて……ありがとうございます」

この日も、食事を終え、比奈の家まで送ってもらっていた。別れ際、車を降りた比奈は、壱哉にお礼を言った。

壱哉と二人きりで会うのは今日で四度目。わずか数ヶ月の間にこれだけ頻繁ひびんに帰省きせいしていれば、母に疑われても不思議はない。

壱哉も車を降りて、比奈の家の玄関まで見送ってくれる。

「いいえ。比奈さん、明日早く出て行く？」

「そうですね。一度自分のマンションに戻るの、比較的早い時間に」

そう、と言って比奈をじっと見る。じっと見るその目に、吸い寄せられるようだった。だが、なんとか視線を外して、目を伏せる。

「じゃあ、お休みなさい」

玄関の、比奈の腰の高さほどある鉄の扉を開けて中に入る。そうしてもう一度壱哉を見上げると、比奈の前に立っていた。彼の指先がそっと頬を撫なでた。

鉄の扉を挟んで、壱哉が身体を引き寄せる。

声を出す暇もなかった。抱きしめられて、壱哉の胸に頬が当たる。温かい壱哉の身体を感じて、比奈は息が詰まりそうになった。

「壱哉さん、あの……っん」

比奈の実家の玄関前で抱き寄せられて、唇がしっとり重なる。柔らかさを感じて比奈は目を閉じた。こんなところでキスをされるとは思わなかった。父や母に気付かれでもしたら、もし近所の人に見られたら、と思うと気が気じゃない。でもキスは心地よくて、上手うまくて……

キスが上手うまいのは、それだけ経験けんげんがあるからだろう。比奈だって、健三のことがずっと好きだったとはいえ、男性と付き合ひ、キスをしたことだってある。キスと言っても軽いキスで、甘いキスとはほど遠かったけれど。それにしても……

唇が離れたところで、左右を見て、玄関も確認する。大丈夫、誰にも見られていない。ホッとして、壱哉に視線を移す。

「誰もいなかったよ」

「そう、ですね。よかった」

キスが心地よくて、比奈はなにも考えられなくなっていた。けれど壱哉は余裕顔だ。きつと、誰もいないのは計算済みだったのだろう。

「キス、上手ですね。するタイミングも、絶妙」

「ありがとう、褒め言葉として取っておくよ」

と壱哉は言った。にこりと笑ったその唇に、先ほど塗り直したばかりの比奈の口紅の色

が移っている。それがなんだか唇を奪った戦利品のように見えて、比奈は唇をキュッと閉じた。

「なんか、負けた気がするの、気のせいでしょうか」

比奈が忝哉を見上げると、忝哉は唇を左の親指で拭った。忝哉は左利きなのだ。

「負けたのは僕の方だと思うけど」

意味がわからなくて首を傾げると、忝哉の大きな左手が比奈の頬を撫でた。

「また今度、電話する」

比奈は無言で頷いた。忝哉は車に乗り込み、比奈に手を振った。そして静かに車を発進させ、比奈の視界から消える。比奈はそこで小さく息を吐き、玄関のドアを開けた。靴を脱ぎながら、ただいま、と言うと、お帰りなさい、と母の声が返ってくる。

「早かったね。お友達と食事に行ったんでしょ」

「うん。でも明日は早いし、途中で抜けたの」

本当は、忝哉の配慮で早く家に帰されたのだ。夜九時半、普段ならまだ遊んでいる時間。それでも、明日の仕事のために早く寝ろ、と言わんばかりに家に帰された。

そういう大人びた配慮に、やや腹が立つ。普通、そこまで相手の心配をするか？ と比奈は言いたい。今まで付き合った人たちはそういうことは言わなかったし、比奈の自由にさせてくれた。なのに忝哉は、仕事に関することにかぎっては、自由にさせてくれない

のだ。

忝哉はそれだけきちんと仕事をしてきたのだからし、比奈以外の人に対しても大人の配慮をしてきたのだろう。

「お風呂入って、寝るね」

と母に声をかけ、自室に引上げた。

比奈が下着を持って浴室へ向かおうとした時、スマホの画面にメールの受信通知が表示されているのに気付く。メールは忝哉からだだった。

『唇の誘惑に負けました。とても可愛かった。ありがとう』

比奈は全身ががっとなった。顔が熱い。思わず、スマホを枕めがけて投げつける。

「何やってんの、ちょっと比奈！ 静かにしなさい！」

母の声が飛んできた。急いで浴室に行き、服を脱いで髪の毛をゴムでまとめた。軽く身体を流してから浴槽に浸かる。湯に顔をつけて、しばらく息を止めた。

息が苦しくなって顔を上げ、下唇を噛む。忝哉の唇の感触がまだ残っている。

「バックじゃないの、何よ、あのメッセージー」

忝哉からそんなメッセージをもらうなんて、それこそ比奈の許容範囲外。二人だけで会ったのは、通算たった四回。しかも、ちょっと前までは忝哉のことが苦手で、嫌いだとさえ思っていた。

なのに、壹哉によって恋心が引き出されかけている。壹哉に惹かれている自分が許せない。どうしても、許せない。本当に苦手だった人だから。

風呂に浸かりながら、最初にキスを交わしたのはいつだろうと思いつ返す。壹哉の店を不本意ながら訪れた日から、全ては始まった――

☆ ☆ ☆

「またスマホと睨めっこ？」

と後ろから覗き込んできたのは、塾の事務員の牧田という女性だった。

「やだ、驚かさないでください」

「最近の比奈ちゃんってば、ちよっと手が空くとスマホ見てる」
慌ててスマホをしまった。

「気になるお相手は誰？ 連休以降、おかしいけど」

そう言って牧田は、ふふ、と笑った。

「おかしくなんかありませんよ。普通です」

「あら、そう？ じゃあ、篠原壹哉って誰？」

「健三のお兄さんですよ」

牧田と比奈と健三は、何度も一緒に飲みに行ったことがある仲だ。

「っていうか、牧田さん、いつの間に画面見たんですか」

「ふーん、その彼が、健三君が自慢しまくりのお兄さんなのね」

「でも比奈はさあ、壹兄のこと嫌いなんだよな。な？」

とは、健三に言われ続けてきた言葉。それに対し比奈は、いつもムツとしていた。そんなやり取りを牧田も見えて知っていたから、

「そのお兄さんのこと、本当に嫌いなものねえ。どんな人なんだろう、会ってみたい」と面白がっていたほどだ。

今日も牧田は、「お兄さんに会ってみたいわ。連れてってよ」と比奈に催促する。牧田はこうと決めたら一人でも出かけていく性格なので、比奈としては従うほかはない。

「今度の土曜日、予定がないならいいですけど」

渋々比奈が言うのと、

「予定があっても、キャンセルよ」

と牧田は綺麗に口紅を塗った唇の口角を上げた。そして比奈の肩をポンと叩いて立ち上がり、ヒールの音も高らかに、自分のデスクに戻って行った。

「キャンセルって……」

比奈はため息をついた。
 牧田は面白がつているだけなのだ。でも比奈にとつては、ただ壱哉に会うというだけでも、結構重圧だった。
 次の土曜まで、後四日。

☆ ☆ ☆

「ここが、そのお店ね。いい雰囲気だわ」

秋月堂は老舗の和菓子屋で、古民家の造りをそのまま活かしている。先祖代々受け継がれてきた歴史ある家業で、現在は四代目。三代目にあたるのは壱哉たちの父だが、六年前に他界している。

予定があつてもキャンセルすると言つたのは本当だったのか嘘だったのか、ともかく牧田と比奈は約束通り秋月堂の前に来た。

「で、例のお兄さんはいるの」

「お昼時だから、交代してるかもしれませんが」

昼時といつても、午後二時近く。近くでランチを済ませてきたので、この時間になったのだ。牧田は比奈の案内を待たず、さっさと秋月堂の暖簾をくぐってしまった。

「いらつしやいませ」

壱哉ではなく女性の声が聞こえたので比奈はホツとした。

だが、それも束の間、壱哉の低い声がかウンターの方から聞こえてきた。牧田が比奈の肩を軽く叩いてにやつと笑う。

「いらつしやい、比奈さん。今日はお友達と？」

壱哉がこちらを見て笑っていた。

「ええ、まあ、はい。……座つてもいいですか？」

壱哉は、どこでもどうぞ、と言つた。週末は混んでいることが多いが、客は比奈たちの他は二組しかいなかった。

牧田は座つた途端に笑みを浮かべ、ため息を吐いた。

「いやー、びっくり。すっこい、かなり男前じゃない。健三君の話以上だわ。着物はきまつてるし、姿勢いいし、声もいいし。それに、比奈さんって、呼ぶ口調も丁寧ね。私もあの声で千沙さんって呼ばれたいわー」

壱哉を絶賛しまくる牧田に、比奈は緩く笑って頷いた。

「で、あの素敵な彼が比奈ちゃんにお蕎麦をご馳走してくれた、と」

健三に約束をすっぽかされた日、壱哉と食事に向かった先は蕎麦屋だった。家の近所にこんなに素敵で美味しい店があつたのかと驚いた。

「そうですね」

「かーっ！ いいわ、よすぎる！」

牧田がここまで男を褒めるなんてあり得ない。今まで何度か一緒に合コンにも行ったけど、たいていは男性の批評をするだけで終わりだった。そんな牧田が、忝哉を褒めちぎっているのだ。

「でもね、あの人結構性格がいいというか、人の言葉の揚げ足取りますよ。それに、淡々とした口調だから、嫌味はマジで冷たく聞こえるし。私が高校生の頃なんか、勉強を教えにくれたのはいいけど、本当に馬鹿にしたように、いろんなこと言われてですね」

比奈がそう語っていると、牧田は笑みを浮かべて比奈の肩を軽く叩く。そして目で何事か訴えるので、比奈はその視線の方へと目を向けた。

忝哉がお茶を運んできたのだった。そして淡々とした口調でこう言った。

「比奈さんと健三は昔から本当に勉強が好きだったよね。高校時代、試験勉強はいつも一夜漬け。それに大学では追試の勉強をよくしてたっけ」

「へえ、追試受けてたの？ 比奈ちゃん」

と牧田も話ののってきた。

「いやだ、話半分に聞いてくださいよ。勉強好きといっても、忝哉さんにはとても敵いませんでしたよ」

「いやいや、僕よりも勉強好きなのは比奈さんと健三だよ。同じ科目の試験を二度も受けるなんて、よほど勉強好きでなければなせる業わざじゃない」

そこで牧田が大笑いをかました。

「やめときなさいよ、比奈ちゃん。勝てっこないから」

その言い方にムッとして、比奈は唇を引き締める。

「ところで、今日のお勧めはなんですか」

笑いをどうにか引つ込めて、牧田が聞くと、忝哉はメニューを見ずに流暢りゅうちやうに和菓子の説明をした。そのスムーズさに比奈は、デキる男を見せつけられているように感じた。

「じゃあ私はそのお勧めにしよう。お抹茶のセットでお願いします。比奈ちゃんは？」

「私も同じもので」

忝哉が「かしこまりました」と言っつて背を向けようとした時だった。牧田が「ちよっと待ってください」と忝哉を引き止めた。

「今日はお暇ですか？」

牧田は艶然えんぜんと微笑んだ。唇に塗られた濃いピンクの口紅くちびるが綺麗な弧を描く。

「暇、というのは店が終わってから、ということでしょうか？」

「ええ、そうです。よかったらお食事でもどうかと。このあたりだったら、お食事できる店もいろいろあるでしょうし」

何を言っているのか、と比奈は牧田を遮りたかったが、かろうじて我慢した。

「もちろん比奈ちゃんも一緒に、ね」

にこりと笑みを向けられて、比奈は首を振った。

「いえ、私は。あの、沓哉さんもきつとお忙しいと思うから」

沓哉の方を見ずにそう言うと、牧田は、あら、と沓哉に視線を向けた。

「お忙しい？」

「……いえ、忙しくないんですが、今日は先約がありますから。またの機会に」

沓哉にしては珍しく、言葉を濁す感じの返事だった。沓哉らしくない、と比奈は内心首を傾げる。

「先約って健三君でしょう？ 昨日、彼から聞きましたよ」

健三と牧田は仲がいい。だから特に用事がなくても電話をして、週末の予定を聞いていたっておかしくはない。でも、どうしてこのタイミングで？ と言いたくなるくらい絶妙な突っ込みだった。

「健三君、可愛い子も連れてくるって言ってましたけど」

「健三と、お知り合いのようですね」

「ええ。だから一緒に行っても、構わないでしょう？ 比奈ちゃんだって健三君と幼馴染

だし、なんの問題もないわよね」

二人の会話にうつすら不穏な空気が漂っている気がして、比奈は沓哉と牧田を心配そうに見つめた。

すると沓哉が、いかにもため息をつきますよ、という感じで息を吐き、こう言った。

「わかりました、いいですよ。健三との待ち合わせは七時、東京に出てきてほしいと言われているんです。だから今日は仕事を早めに上がるつもりです」

「待ち合わせ場所は？」

「丸の内中央口です。では、お抹茶のセット、今すぐお持ちしますね」

沓哉は笑顔で軽く頭を下げ、背を向けた。

「牧田さん、いったいどうしたんですか？ あんな言い方して」

「んーん、別に」

牧田は時々、こういう感じになる。何か秘密にしているような、そんな感じだ。

☆ ☆ ☆

「牧田さん、いつの間に健三の週末の予定を聞いてたんですか」

「んー、ちょっとね。思うところがあって、電話したの。そうしたら今日、さっきのお兄さんと会うことになってるって聞いて」

ふふ、と笑う牧田は何か企んでいるようだった。こういうところ、少し忝哉と似ている、と比奈は思う。

ついこの前まで、比奈にとって忝哉は本当に苦手な人だった。だが、その苦手だという気持ちほどこからきたのだろう。自分の感じ方や考え方が幼かったから、というだけのようにも思える。

その日、比奈たちは午後七時に間に合うように東京駅丸の内中央口へ向かった。

「ほら、健三君、来たわ」

見ると、健三が手を振りながら近づいてくる。その隣には、細身の、美人というか、可愛い女性がいた。少し肌寒くなってきた気候に合う、薄手のAラインコートを羽織り、ベージュのワンピースを着ている。そしてその唇には、淡い色のルージュが光っていた。にこりと笑う表情が本当に可愛らしい。そのうえ小顔で、肩ラインの緩いウェーブヘアがよく似合っている。

「こんにちは。川島さん、ですか」

と、その女性が言った。

「健三君からよく川島さんの話を聞くんですよ。本当、可愛い」

いやいや、そういうあなたの方が、と比奈は言いたい。比奈の自慢といえは大きい猫目、それだけだ。でもこの女性は、もっと魅力的なものをたくさん持っている気がする。

「あのおな、比奈。この子は宮本加奈ちゃん。俺の会社に派遣で来てるんだ。そこで加奈ちゃん、こつちが俺の幼馴染で川島比奈。それから、こちらのお姉さまは牧田千沙さん」
健三が簡単に比奈と牧田の紹介を終えたところで、加奈は比奈たちの後ろへ視線を移した。

笑みを浮かべて加奈が声を上げる。

「課長！」

課長というのは、なんと忝哉のことだった。加奈は思いがけず忝哉と久々の再会をし、嬉しくて堪らない様子だった。女らしい小さな手で、遠慮なく忝哉の腕に纏ったりもしている。

「あらま、ラブラブね」

と牧田が声を潜めた。比奈は心の中で、この人は篠原忝哉よ、課長なんていう名前じゃな
いわ、と毒づいていた。嫌な気分だった。

「比奈、あのおな」

と健三がそっと耳打ちをした。

「宮本さん、忝哉の元カノなんだよ」

「へえ、そうなの」

元カノと聞いて、ムカツときた。そして、忝哉が加奈を見て微笑む姿に、さらにイライ

ラが募る。

「ところでさ、なんでお前が来てるんだよ」と健三が聞く。

「……来てちゃ悪い？」と比奈はつつけんどんに聞き返した。

「いや、悪くはないよ。お前、壱兄とさあ、その、イイ感じじゃんか」

何がイイ感じなものか、ただ食事をしただけ。健三、馬鹿じゃないの、と比奈は思った。「どこがいい感じなわけ？ 意味わかんないし。つていうか、壱哉さんは元カノとヨリ戻したいんじゃないの？」

「いや、違うって」

「どう違うわけ？ 現にこうして元カノと会ってるのに」

比奈は健三に食ってかかった。すると、いつの間にか、壱哉と加奈が近くにきていた。

壱哉は加奈の手をそつと解き、比奈を見た。けれど、すぐにその目を逸らして、健三に笑顔を向けた。

「どこに行くの？ 健三」

壱哉が聞くと、すかさず加奈が口を開く。

「ラミパスよね？ 健三君」

壱哉は健三に聞いたのに、加奈が答えた。そして加奈は、比奈を見てにこりと笑った。「では行きましょ」

牧田が先頭に立ち、比奈も歩き出した。その比奈の頬を、壱哉が本当に軽く、一瞬だけ手の甲で触れる。でもその瞬間のことは、他の誰も気付かなかった。

比奈と壱哉の視線が、ほんの一瞬絡み合う。

意味わかんない、と比奈は何度も心の中で叫んだ。

4

健三たちとラミパスという洋風居酒屋に向かった。

加奈はずつと壱哉の隣を歩いていた。比奈はそれを後ろから見つめ、牧田と話しながら歩いた。当然、気分が晴れない。

「比奈さん、飲み物を選ばないと」

にこりと笑う壱哉。その隣には加奈がいる。加奈は少し首を傾げて比奈を見ている。その仕事も可愛い。

「課長、川島さんのことを比奈さんって呼んでるんですか」

と加奈が会話に割り込んできた。

壱哉は会社で課長という役職だったことを、比奈は初めて知った。